

The Relations between Free Answers and Item Responses about Stress Related Feelings

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: DOI, Kiyoharu メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/3839

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



ストレス関連感覚に対する自由回答と項目反応の関係

短期大学部 キャリアデザイン学科 土井 聖陽

要旨：土井(2011)によるストレス関連感覚の自由回答から得られた疲労、攻撃性、フラストレーション、その他の4語群と3種類の項目尺度の疲労、愛想の悪いこと、消耗感の関係を分析した。その結果、フラストレーション-アグレッションの安定性と広義の疲労感を変数とサンプルの両方に認められた。

キーワード： ストレス関連感覚、自由回答、フラストレーション-アグレッション、疲労感、攻撃性

目的

土井(2011)は、ストレス関連感覚に関する自由回答の結果から、土井・大隅(2000)と同じ疲労、攻撃性、フラストレーションそしてその他の4語群を抽出している。

本研究では、同時に測定された3尺度、疲労の「自覚症状しらべ」(吉岡、1973)、YG性格検査のAg尺度、バーアウトスケール(稲岡、1988)と語群との関係を分析するとともに、サンプルとの関係を多次的に検討したい。

方法

自由回答は次の誘導文によって20通りが求められた。「ストレスは以前からよく話題になっています。また文部省の昨年の調査では、小学2年生の3人に1人、中学2年生の5人に3人が普段から疲れていると感じています。ストレス、精神的疲労、精神的消耗などは、年齢、性別に関係なく一般的、日常的な問題になっています。あなたのストレス、精神的疲労、精神的消耗などに関して、言葉、分節、文章などで思いつくままに20通り表現してください。方言を使用してもかまいません。原因を説明するのではなく、あなたの精神的な状態を表現してください。」

質問項目は、まず疲労の「自覚症状しらべ」で、「1. 頭がおもい」、「11. 考えがまとまらない」、「21. 頭が痛い」などに関して該当する場合に○を記入する30項目である。続いて、YG性格検査のAg尺度10項目で、「はい ? いいえ」の3件に回答する。最後に、バーアウトスケールは、「1. 疲れやすい」、「9. みじめな気持ちになる」、「17. なげやりな気持ちになる」な

どに「1. まったくない、2. ごくまれにある、3. まれにある、4. ときどきある、5. しばしばある、6. たいていある、7. いつもある」の7件に回答する21項目である。3尺度とも実験者が一定の速度で読みあげて回答を求め、10分程度で終了した。研究協力者は男子大学生31名で、授業中に実施された。

結果

自由回答も質問項目も31名全員が回答し、全ての項目に回答されていた。3尺度の平均点は、疲労の自覚症状しらべが7.80、バーアウトが2.96、YGのAgが10.01であった。疲労の平均は様々な職種の労働者の作業前の値に近く、バーアウトも2台が心身ともに健全で3台がバーアウトの徴候がみられるであり、Agは40パーセントに近く、3尺度ともほぼ平均的であった。

3尺度と4語群との間の相関は、表1である。まず自由回答の4語群の關係に注目すると、攻撃性と疲労、攻撃性とその他に負の0.4台の中程度の値がある以外は低かった。主成分分析を行うと、第1主成分と第2主成分の寄与率が其々43.6%、33.0%であった。第1主成分で、攻撃性が0.826、フラストレーションが0.633そしてその他が-.705であった。相関係数では攻撃性とフラストレーションが0.238と低い値であったにもかかわらず、第1主成分で攻撃性とフラストレーションが主になった次元が抽出されている。また、主成分得点においても最も高い2.096を示したサンプル31番は、攻撃性10語、フラストレーション7語で合計16語はサンプルの中で両語群の使用者の最高値であった。逆に最低値の-1.906のサンプル8番は、攻撃性1

表 1 4 語群と 3 項目尺度間相関

	攻撃性	疲労	フラストレ ーション	その他	疲労 30 項目	バーンア ウト	Ag 尺度
攻撃性	1						
疲労	-0.476	1					
フラストレーション	0.238	-0.04	1				
その他	-0.409	-0.226	-0.339	1			
疲労 30 項目	0.088	0.221	-0.094	-0.088	1		
バーンアウト	-0.039	0.135	-0.168	0.077	0.63	1	
Ag 尺度	-0.131	-0.233	-0.387	0.096	-0.174	-0.201	1

表 2 4 語群の主成分負荷

	第 1 主成分	第 2 主成分
攻撃性	0.826	-0.358
疲労	-0.351	0.883
フラストレーション	0.633	0.319
その他	-0.705	-0.559

表 3 7 変数の主成分負荷

	第 1 主成分	第 2 主成分
攻撃性	0.209	0.688
疲労	0.433	-0.382
フラストレーション	0.331	0.696
その他	-0.453	-0.575
疲労 30 項目	0.721	-0.373
バーンアウト	0.627	-0.506
Ag 尺度	-0.637	-0.185

表 4 31 サンプルの主成分得点

	第 1 主成分	第 2 主成分
1	-0.281	0.194
2	-0.997	0.298
3	1.362	-0.818
4	0.76	0.708
5	0.535	-0.33
6	0.305	-0.595
7	0.705	-0.349
8	-1.49	-1.624
9	1.749	-1.451
10	-1.148	-0.366
11	-0.971	-0.615
12	0.363	0.595
13	0.98	-1.56
14	-0.781	0.51
15	-0.999	0.472
16	-1.169	-0.871
17	-1.924	-0.07
18	-0.496	1.688
19	-0.995	-1.242
20	-0.166	0.846
21	-0.731	0.459
22	1.403	-0.405
23	-0.187	-1.445
24	-0.632	0.17
25	0.823	0.072
26	1.4	-0.874
27	0.632	1.795
28	1.337	0.88
29	-0.38	0.52
30	1.066	1.27
31	-0.075	2.141

語、フラストレーション 0 語で合計 1 語は最低値であり、変数とサンプルの整合的な関係がみられた。

続いて 4 語群と 3 項目尺度全体の関係を検討するために主成分分析を行った。寄与率がそれぞれ 26.7%と 26.6%の第 1 主成分と第 2 主成分による 2 次元において、第 1 象限に語の攻撃とフラストレーション、第 3 象限に Ag 尺度とその他、第 4 象限に疲労と疲労 30 項目、バーンアウトが布置した。同様に表 4 から第 1 主成分得点と第 2 主成分得点でサンプルを対応させると第 1 象限で変数のフラストレーションと攻撃の語群に対応するサンプルの 27 番と 30 番は、両語群の語をともに合計 16 語と 15 語を使用しており最高値と 2 位であった。同様に第 4 象限で語の疲労と項目のバーンアウトと疲労 30 項目に対応するサンプルの 9 番、13 番、26 番、3 番の疲労使用語数、疲労 30 項目尺度点、バーンアウト点はそれぞれ、(9, 25, 4.19)、(9, 20,

3.85)、(14, 11, 3.28)、(7, 19, 4.14) で総じて高得点である。第3象限の Ag 尺度と語のその他に対応するサンプル8番、19番、16番の両変数の点数はそれぞれ、(16, 9)、(11, 10)、(14, 9) であり、やはり高めである。

考察

4 語群の相関係数では高い値は見られなかったが、主成分分析では、第1主成分にフラストレーション-アグレッションが認められた。正と負で高い主成分得点を示したサンプルも整合的な特色を見せている。変数とサンプルの両方にフラストレーション-アグレッションが認められたと言えよう。

続いて3種類の項目尺度と4語群の7変数に関する主成分分析では、第1象限にフラストレーション-アグレッション、第4象限は疲労に関する3変数、第3象限にその他と Ag 尺度が布置した。第1象限に語群と項目尺度の7変数においても、フラストレーション-アグレッションが現れた。第4象限に自由回答と質問項目という測定の違いと、状態的疲労（自覚症状し

らべ）と消耗感（バーンアウト）という内容の違いを越えて疲労の3変数が集まった。第3象限は、その他とした多様な語とやや多義的な Ag 尺度が結びつき、フラストレーション、攻撃性、疲労感とは異なるストレス感とも言うべき感覚が抽出されたとも考えられる。

引用文献

- 土井聖陽・大隅 昇 (2000) 疲労・ストレスの統計解析日本分類学会 第16回研究報告会 研究報告予稿集 pp.77-78.
- 土井聖陽 (2011) ストレス関連感覚に対する自由回答の検討 大阪樟蔭女子大学研究紀要 第2巻 113-115.
- 稲岡文昭 (1988) Burnout 現象とバーンアウトスケール 看護研究 第21巻第2号 pp.27-36.
- 吉竹 博 (1973) 改訂 産業疲労-自覚症状からのアプローチ 労働科学研究所

